

巻 頭 言

長崎短期大学 学長

安部 恵美子

急激な社会の変化の中、労働市場や産業・就業構造の流動化などにより、将来予測が困難になりつつある時代を生き抜く若者や学生にとって、大学での学修が基盤とならなければならない。変化に対応したり未来への活路を見出したりする原動力となる有意な人材育成のために大学が、機能分化を進めつつ教育の質をどう高めていくかが、高等教育政策の中心課題（中央教育審議会大学分科会審議まとめ『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』平成24年3月26日）となっています。

地域に密着した高等教育機関である短期大学も、教育内容をより向上・充実させ教育の質を担保するために、質を伴った学修時間の実質的な増加・確保による主体的な学びの確立を目指していかなければなりません。

そのためには、何よりも授業を担う教員がそのことの重要性を自覚し、個々の授業をさらに質的に進化させることが必要なのですが、それに加えて、学び続ける主体としてのモデルを教員が示すことが、学生の自ら学ぶ姿勢の確立を促すものと捉える視点が必要です。

また、学生、同僚教員、関連分野の研究者集団、さらには地域のステークホルダーに研究成果を広く公開して、彼らの指導や批評を受けることは、高等教育に携わる者としての義務であると思います。

今回とりまとめた、本研究紀要に掲載されたどの論文にも、執筆担当教員の研究に対する篤い思いが込められているように感じます。18年度から実施し、5年を経過した「研究費傾斜配分制度」により展開された研究活動も報告され、アカデミックな研究のみならず、短大の教育活動の中で積み上げられてきた、実践研究の成果も報告されています。

各教員が、ここに積み上げた研究業績に対し学長として敬意を表すると共に、その研究成果が学生の教育に還元されることを心から期待します。

最後になりましたが、なかなかはかどらぬ原稿の集約状況に心を砕きながら、編集作業に携わっていただいた紀要編集委員諸氏のご尽力に感謝申し上げます。

平成24年3月

学長 安部恵美子